

2013 年 6 月 15 日
リーダー会了承 (Email)

丹沢水無川支流・源次郎沢、負傷事故報告書

1. 日時、負傷場所 2012 年 5 月 27 日 (日) 晴 丹沢・源次郎沢 F 4

2. 目的、メンバーと沢経験度 (事故発生時までの経験) (萩原記))

主としては直後に予定されている沢講習に備えるため、沢講習前の足慣らしとして丹沢の源次郎沢を萩原がリーダーで計画。全くの未経験でなければ誰でも参加歓迎として集会で参加者を募った。メンバーは萩原、山田眞、加藤、山田典、長谷川。メンバー中では長谷川が一番経験は少なかった。

萩原智子 (L) : 2004 年入会 (第 49 期))、初級～中級中心年平均 10～15 入溪
加藤秀夫 : 2007 年入会 (第 52 期)、'12 年初の沢、沢経験は乏しいが岩経験豊富
山田眞敬 : 2008 年入会 (第 53 期)、初級～中級中心年平均 10～15 入溪
長谷川香織 : 2011 年入会 (第 56 期)、入会后 3 回目の沢、'12 年は初の沢
山田典之 : 2012 年入会 (第 57 期)、入会后 2 回目の沢、会での経験技量不明

3. 本報告書作成前の措置と経緯

- ・2012 年 6 月 6 日 : 集会にて長谷川香織の負傷事故について萩原 L、山田眞、加藤からそれぞれ報告と事故原因を説明。

4. 本報告書作成に至った経緯

- ・2013 年 6 月 25 日 : 「岳人」から「遭難未済事例」について本件事故を取材したいとの要請。
- ・2013 年 6 月 28 日 : 上記について種々検討したが北稜内での事故記録未整理・未分析を理由に断り、本件取りまとめに至った。

5. 事故発生時の行動

- ・6 : 00 王子集合、山田車 (萩原、長谷川、加藤同乗) - 東名秦野 - 戸川キャンプ場、山田典とキャンプ場で合流
- ・9 : 00 遡行開始し F 4 に至る。
(萩原記)

F 4 を右壁からフリー通過、山田典、山田眞、加藤に続き長谷川は 4 番目、萩原ラスト。前の 3 人が上部トラバースしている様子を見てちょっと嫌らしいかな？と感じたのにも関わらず、先行にロープやお助け紐の要請をせずそのまま行かせてしまった。結果長谷川がトラバースでスリップして水線を落差 3 M 程沢床まで滑落。



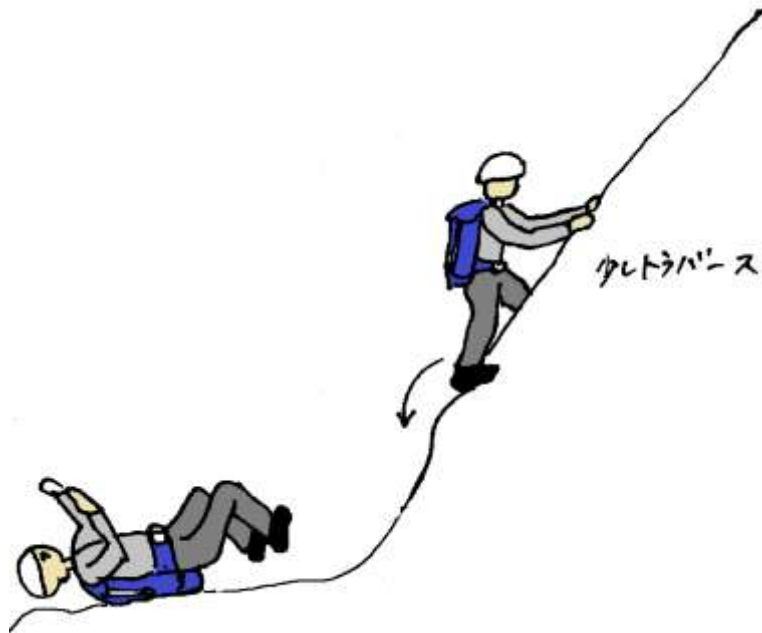
(長谷川記)

◆落下時の状況

トラバースの途中左足を踏み外し、右足より落下。



右足のみで最初に着地し、体全体は後方に倒れる



このままの姿勢で沢筋を滑るように落ちる
 最初の落下（踵の着地）までは1.5m程
 その後仰向けのまま1.5m程滑り落ちる
 その下は急落箇所だったが、なんとかその手前で停止
 心理的要因：加藤が同じ所ですこし苦戦して見えた。

加藤でもツッカエルところを、自分が登れるのか？と弱気になる。

しかし、先行組に不安を伝えず、ザイルを要求せずに、とりついた。

6. 事故発生後の状況（萩原記）

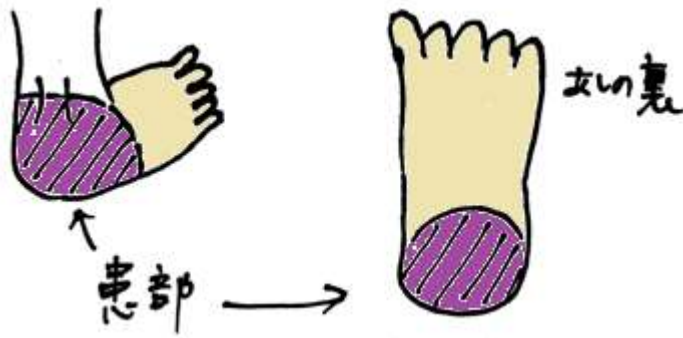
しばらく休み、大丈夫みたい...とのことで滝心の左壁を確保で上げる。ケガを感じさせることなく慎重に遡行を継続。詰めあげ、靴履き換え時に改めて足の異常の報告。以降、長谷川のザックは加藤が背負い、山田真が持参していたダブルストックを使用して貫い、思わぬ転倒防止のためシュリングで山田真が後ろからタイト気味に確保、先行は浮き石や滑りやすい場所などを声かけしつつ時間をかけて自力下山。幸い車アプローチだったので、コンビニで調達した氷で帰路足を冷やしながら長谷川を自宅まで送り届ける。

7. 負傷の程度

（長谷川記）

◆怪我の状況

- ・落下直後・・・左足に激しい痛みあり。この時、自分は焦っているせいもありすぐに行動しようとしたましたが、萩原Lの「落ち着いて。少し安静にした方がいい」とのアドバイスがあり、メンタル面でも大変助けられました。
- ・その後、痛みも引き歩けたので、遡行を継続してもらう。この時点では、沢靴を脱ぐ等して患部の確認はしていません。
- ・登山靴に履き替える段になり、下記図のように踵全体が紫色にうっ血していた。持参していた、ロキソニンの内服薬と同じくロキソニンのシップを貼りテーピングで固定。



- ・下山後はすぐに加藤が氷を購入して患部を冷やすようにアドバイスあり。自宅に送って頂いた後もアイスノンで一晩中冷やしていました。

◆病院の診断と経過

- ・翌朝、前日よりも腫れ・痛みはひどい。
- ・レントゲン・問診等で骨には全く問題ないが、強打撲の為うっ血と腫れがひどく脚を地面に着かないように松葉づえを着くように言われる。
- ・鎮痛剤（内服薬）と同じく鎮痛剤（シップ）を処方される。

8. 事故原因の推定

（直接的要因）

- ・長谷川は入会後 3 回目の沢で湿っぽかったり、乾いたりの沢の壁に不慣れであり、また、岩登りの経験も浅く、ロープを出して確保しなかったことが主な原因（加藤記）。
- ・フェルトが乾いた状態で滑りやすかった（山田真記）。

（間接的要因）

- ・全てリーダーに任せっぱなしで、他のメンバーは積極的な助言をしなかった（加藤記）。
- ・遡行前、萩原 L はトップに山田真を指名したが、山田典が源次郎沢を複数回経験し、また本人のトップをやりたいという希望があったので、山田真がそれでは交互にトップをやりますか？という玉虫色の提案をし、それを萩原 L が受け入れた（山田真記）。
- ・上記のやりとりがあって注意力や確保の意識が薄れる（加藤記）。
- ・会での沢は初めてであった山田典は後続の技量が不明なので後続の技量に応じたアドバイスができなかった（山田真記）。
- ・交互にトップをやることのより競争心が出て後続に注意が手薄になったのではないかと。これについては全部否定しているわけではなく、そういう手法を始めて沢にご一緒した山田典さんとやるべきでなかったと思った（山田真記）。
- ・メンバーの情報共有（山田典記）
パーティーを組む際、メンバーの情報（経験、技術）を全員で共有すること。特に初心者の情報については、CL、SLは積極的にメンバーに知らしめること。

9. 防止策

- ・沢の経験の有無にかかわらず、岩壁の登攀などはロープを出すことを基本とする（加藤記）。
- ・ロープは実際に確保するかどうかは別にしてトップが担ぐ（加藤記）。

- ・山行はチームとして互いの安全を確保しながら行うものであり、「ほうれんそう（報告、連絡、相談）」を必ず実行する（加藤記）。
- ・リーダーは役割分担を明確にし、参加者はそれに従う。ただし、相互のコミュニケーションを大事にし、意思の疎通を図りながら行動する（加藤記）。

10. 今後の課題

- ・事故後、山田典は即下山の提案をしたが、長谷川の大丈夫との言葉で萩原 L は続行を判断した。しかし、今後は落下した場合は直ちに下山し負傷を手当てすることが早期回復に繋がるものとする（加藤記）。
- ・沢山行は、読図、登攀、ルートファイティングなど総合力が問われる山行であり、段階を踏んだトレーニングが求められる。

以上

遡行図

